



「circle」 木村陸
(本学工学部学生 / tachibana photo)

平安の昔から、
「昔の人」の懐かしい思い出を
呼びおこすとされた橋の花の香り。
その橋を最も好んだ「時の鳥 (ホトトギス)」。
「CHRONOS 時の鳥」は、
ギリシア神話の「時の神」クロノスを頭上に戴き、
「時」の大空をはばたく鳥を
イメージしています。

クロノス [時の鳥] vol.51 2024.10

C
O
N
T
E
N
T
S
INFORMATION

〈巻頭エッセイ〉
『源氏物語』とその周辺
過去に開かれた窓 6
作品のウチソト 6
歴史遺産とジェンダー 6
イギリス女性生活誌 51
近代日本音楽史を彩る女性たち 12
女性歴史文化研究所 第31回シンポジウム報告

『源氏物語』とその周辺

野村 倫子 本学文学部日本語日本文学科教授

『源氏物語』の執筆と流布には二つの家の流れが関与している。

作者と言われる紫式部の家系は、曾祖父で百人一首の三十六歌仙の一人である藤原兼輔以来、歌詠みとして高名であり、加えて父の為時は漢詩もよくした。また母方の外祖父為信の周辺も和歌にだけ、縁戚をたどると『蜻蛉日記』の作者もいる、そのような文学環境にあった。では、流布についてはどうか。紫式部が仕えた中宮彰子は当然であるが、その父藤原道長の力が大きい。

道長の祖先の家系をたどると、藤原忠平の子息たちは小野宮家（実頼）、九条家（師輔）、小一条家（師尹）の三流に別れ、道長は九条家師輔の孫にあたる。忠平は『真信公記』を、実頼は『清慎公記』を、師輔は『九曆』を残すなど儀式を中心とした記録にこだわった家系であり、師輔は西宮左大臣源高明の『西宮記』を取り込んで『九条年中行事』を完成させている（山中裕『平安時代の古記録と貴族文化』思文閣出版、一九八八年）。さらに兼家の権妻（妾）の一人は『蜻蛉日記』を書き、師輔の子で出家して多武峯に入った高光の和歌を中心にとめた『多武峯少将物語』（『高光日記』とも）も周辺で編纂されるなど、文学への接近もなされていた。兼家の嫡子道隆は娘の一条天皇中宮（後に皇后）定子の後宮に清少

納言を得て、『枕草子』執筆につなぐ。和歌の家に生まれて父に漢文を学んだ作者、その文才を後宮で発揮させた后、その背後にある関白という組み合わせは、〈清少納言・定子・道隆〉あるいは〈紫式部・彰子・道長〉に対応する。『枕草子』が定子周辺に軸足を置き、漢詩文の表層的な享受に終始したのに対して、『源氏物語』は史書を通して人間の本質に踏み込んだ深さゆえに道長や中宮彰子の権力下に安住することはなかった。

ところで女房名である紫式部の名を冠するものに、家集『紫式部集』と『紫式部日記』が残されている。『紫式部集』は和歌の数や配置が異なる三系統が存し（久保田孝夫・廣田収・横井孝編著『紫式部集大成』二〇〇八年、笠間書院）、『紫式部日記』も後半の消息文や断片的な記事との関係が不明で成立状況が確定できない。彰子の出産記事の記録という「女房日記」に私的な記事が混入したとらえがちであるが、「献上本」成立後作成された「私家本」が現存の『紫式部日記』である（山本淳子『紫式部日記と王朝貴族社会』二〇一六年、和泉書院）という説がある。一方、私的な記事こそが女性の手になる『家の記』（久保朝孝『紫式部日記論』二〇二〇年、武蔵野書院）だと認定しようとする動きも見逃せない。

その『紫式部日記』には宴席で左衛門督（藤原公任）いる。紫式部がこの三人を挙げたのは、勿論和歌や漢文を中心とした文学方面での知識や才能が高名であったことに拠るのだろうが、随筆、日記、仮名による歴史物語など新しいジャンルの散文の創作に関わったことに、長編物語の作者紫式部が反応したからではなかったか。

しかし、中宮定子賛美を中心にした『枕草子』、道長賛美を主題にした『栄花物語』など「女房」の手による主家賛美と、和泉式部の恋愛の顛末を同一平面上で捉えてよいのかという疑問が残る。東宮の弟宮敦道親王や、東宮妃城子の妹、北の方の名言を傷つける『和泉式部日記』は、裏面から道長賛美に与したとは考えられないだろうか。彰子から敦成親王が誕生した後の道長が警戒するのは、故皇后定子の遺児である第一皇子敦康親王よりも、四人の男官をもつ東宮であろう。東宮には道長の異母妹綏子、道隆の二女原子と九条家出身の妃が二人もいたが、ともに早世し、六人の皇子女に恵まれた小一条家の城子一人が後宮を独占している。和泉式部がスキヤンダルを起こした相手は東宮の弟たちであり、追い出された北の方は城子の妹である。主家一族の栄光を語る作品を広めるのは当然であるが、相手方の瑕瑾を喧伝する作品の流布を容認することもあったのではなからうか。このように『源氏物語』の作者の周辺で新しい形の散文作品が生まれては喧伝され、それらを意識したのが三人に対する文学批評であったとするのは穿ち過ぎであろうか。

『日記』所収の「消息文」には、有名な女性評がある。彰子の後宮で日常の宮仕えとともにする同僚の女房たちの容貌や性格など人間味のある批評が書かれた後に、仕切り直したように和泉式部、赤染衛門、清少納言を対象に文学評が展開される。手紙も交わすという彰子付きの和泉式部、倫子（道長の正室）付きであった年長の赤染衛門、皇后定子の女房であった清少納言と、身近な存在から遠くへと対象をずらしてゆく。ともに日記からも歌集からも交流が確認できないが、一見批判しているように実は歌才に一目置かれている和泉式部、褒めてはいるが屈折した思いを抱かれている赤染衛門（増田繁夫『評伝紫式部』二〇一四年、和泉書院）、清少納言も含めていずれも和歌や漢文の知識に批評を加えている。清少納言の批判の対象が『枕草子』であることは自明だが、和歌を批評された二人も散文の『和泉式部日記』、『栄花物語』の成立に関与したことに意味があったのではないか。

和泉式部は、彰子の敦成親王（後の後一条天皇）出産（寛弘五年（一〇〇八年）九月十一日）の直前に、東宮（のちの三条天皇）の弟宮二人と相次いでスキヤンダルを起こし、寛弘四年に薨去した弟の敦道親王との顛末を『和泉式部日記』にまとめた。自身が宮邸に迎え入れられ、北の方が姉の東宮妃城子の勧めで宮邸を退去するところまでを描く、家集と日記の間のような作品である。歴史物語『栄花物語』の作者には赤染衛門が最有力視されて



過去に 開かれた 窓



杉山 隆一

本学文学部歴史学科准教授

6



20世紀イランにおける女性の権利拡大運動をめぐって

—セディーゲ・ドウラトアーバーディーの生涯から—

近代イランにおける女性の権利拡大運動の出発点となったのは、シーア派の分派であるバブ教の指導者のひとりであった女性、コツラトルエイン（一八一四—一五二）による一八四八年のヴェール着用否定の主張であると言われる。以降、同国での女性の権利拡大運動は、西欧のリベラルな思想や、オスマン朝における女性運動などの影響を受けながら、特に立憲革命（一九〇五—一一）以降に拡大していった。立憲革命から一九二五年のガージャール朝の崩壊期までは、女性の活動がある程度許容されるようリベラルな雰囲気がかつた中で醸成されていたことがその背景であったとされる。運動の中ではヴェール着用への異議、女子教育の



墓参するヴェール姿の女性



セディーゲ・ドウラトアーバーディー (1882 - 1961)

セディーゲの結婚生活は自身が望んだものでなかったためか、一九二一年に破綻を迎える。離婚後に彼女はテヘランに活動拠点を移し、さらに一九二三年には西欧への留学に旅立った。当時すでに四〇代を超えていた彼女ではあったが、バグダード、アレクポ、バイルート、マルセイユ、ベルリンを経由した長旅の末にパリに至る。パリ到着後、ソルボンヌ大学に入学し、教育学と心理学を学ぶ一方で、国際女性参政権連盟の会議への参加や、西欧にて発行されていたペルシア語、フランス語の定期刊行物に女性の権利における西欧の優越性などに関する記事の寄稿を行い、イラン女性の覚醒を訴え続けた。

一九二七年にソルボンヌ大学を卒業してイランに帰国したセディーゲは、在仏中に誕生したパフラヴィー朝の初代皇帝レザ・シャー（在位一九二五—四一）のヴェール着用禁止令など一連の女性政策を支持した。彼女は教育ワクフ省に職を得て、女性に読み書きや、家政学、衛生学、女性の権利などを教えるための教室を開設した。一九三五年には婦人クラブなる女性の教育・職業訓練を行う組織の所長に就任している。ま

必要性や女性の社会参画の推進、一夫多妻制の廃止といった主張が提起されていった。二〇世紀前半には、上記の主張の実現に向けて女性団体が多数結成され、定期刊行物の発行による啓蒙活動などを展開し、女性運動の裾野を広げていった。

こうした主張を唱えた女性の中から、自ら西欧の思想や技術を学び、その成果を女性たちに還元することで、女性の覚醒を促す運動を進めようとする人物が登場してくる。その初期の女性のひとりとして挙げられるのが、セディーゲ・ドウラトアーバーディー（一八八二—一九六一）である。彼女はパフラヴィー朝（一九二五—七九）期のイランにおいて大きな影響力を持った女性運動家として知られる。本稿ではこのセディーゲ・ドウラトアーバーディーの生涯と活動を紹介したい。

セディーゲは一八八二年にイスファハーンの有力ウラマー（イスラーム法学者）の家系に生まれた。イスラーム的伝統を重んじるウラマーの家庭に育ちながらも、幼少時から家庭教師の下でアラビア語、フランス語などを学ぶ機会に恵まれた。当時としては異例であった女子教育の機会を得たがゆえに、女性の権利や地位の向上について

た、先述の雑誌『女性の声』では、家事や育児などの記事を掲載すると共に、ヴェール、一夫多妻制、児童婚といったイスラーム的な慣行に対しても批判の声を上げていった。彼女は実際に留学からの帰国後、ヴェールを生涯着用することはなかった。ただし、レザ・シャーの女性政策は社会の近代化・西欧化の進展を内外に誇示するだけの表面的なものに過ぎなかったことはよく知られており、事実、女性団体の活動には制限を加えていたとされる。こうした状況の下で、セディーゲとしては、国家が掲げた「よき妻、母」という理想の女性像の育成への協力が女性の地位改善に結び付くと考え、自身がフランスで修得した家政学、衛生学などの知識を動員しての女性教育や、女性の権利向上に関する情報や知識の発信に邁進したのであった。一方で、彼女は国家の政策すべてに無条件に迎合していた訳ではなく、政治や外交に関しては『女性の声』の誌上で批判を行い、時には政府と激しく対立する姿もあった。

セディーゲは一九六一年に七九歳で死去する。彼女の活動は、二〇世紀のイランにおける女性の権利拡大・解放運動の素地を形成したものととして評価されている。実際に女性への識字活動は、

早くから意識するようになったと思われる。

一九〇二年、二〇歳の時に彼女は結婚する。この結婚は当時よく見られた家族の希望による強制的なものであったと言われ、彼女が女性解放への意識を強める契機になったとの指摘がある。その後、しばらく経った一九一七年から、彼女は女性の権利拡大を目指した活動を実行に移す。まずは同年とその翌年、イスファハーン最初の女子学校二校を立て続けに開校する。さらにはイスファハーン女性組合なる組織の結成、婦人向け雑誌『女性の声』の発行など、精力的に活動を展開した。しかし、『女性の声』にて主張したヴェール批判、加えて当時の慣習に反した女子教育の推進は、イスラーム的規範にそむくものと解され、伝統を重視する風潮が強かったイスファハーンにおいては、特に保守層から強い攻撃の対象となった。結果、彼女が設立した学校は閉鎖に追い込まれるなど、その活動は即座に袋小路に陥る。教育に関しては、自身の兄のヤフヤー（一八六二—一九三九）が進めた「新方式学校」と呼ばれる西欧的な教育方式のイランへの導入活動が、彼女に影響を与えていたことは間違いなからう。

パフラヴィー朝後期の一九六三年に開始された白色革命ならびに一九七九年のイスラーム革命後に精力的に展開された、女性の識字率は著しい向上を見られた。他方、西欧の思想・学問に基づいた女性の権利拡大の主張は、イスラームの価値を相対化することになり、女性運動の中に宗教か世俗かという二項対立を生じさせることとなった。実際、パフラヴィー朝期にはセディーゲとは逆に宗教的価値を重んじる形での女性の社会進出を目指した活動を展開する勢力も現れる。セディーゲの活動は女性の覚醒を促した点で価値あるものと言えるが、他方で女性運動における宗教・世俗の価値観の対立を招くものともなった。その結果、イランの女性運動は現在に至るまで長くに渡り混迷した状態が続いている。

【参考文献】

- 山崎和美「セディーゲ・ドウラトアーバーディー作品集」女子教育推進に尽力した近代イランの女性知識人と社会の反応 柳橋博之編『イスラーム 知の遺産』東京大学出版会、二〇一四年、二五九—二九六頁。
- Mehrangiz Manouchehri, "DAWLATABADI, SEDIGHA", in Ehsan Yarshater (ed.) *Encyclopaedia Iranica*, online edition. (<https://www.iranicaonline.org/articles/dawlatatabadi-sedigah>, accessed on 30 August, 2024)
- Sohban Lambert-Hurley, Daniel Matichowicz, and Sunita Sharma (eds.), *Three Centuries of Travel Writing by Muslim Women*, Bloomington: Indiana University Press, 2022.

三島由紀夫と坂口安吾

野村 幸一郎 本学文学部日本語日本文学科教授

三島由紀夫は昭和四〇（一九六五）年、伊藤整、本多秋五と行った鼎談で、坂口安吾について、「ぼくは芸術家としていちばん尊敬するのは坂口さんですよ」と語っている。三島が『憂国』を発表したのは昭和三六（一九六一）年一月である。昭和四〇年一月には「太陽と鉄」の連載を開始している。天皇を中心とした日本文化や国体の復権をすでに志向しはじめていた時期に、三島は坂口安吾を最大限、評価しているわけである。

さらに三島はこの鼎談において、「安吾の墮落には個性を超えているものがありますよ。論理的・一貫性にすべてを賭けた人で、つまり時代と一緒に亡びるということのばかばかしさをいちばん知っていたのは安吾で、しかも結果的には肉体自体は亡びたかもしれない。そういう生き方でいちばん論理的なのが安吾の形だと思っていますけれど」

ちゃったっていいんですよ、そんなものは。（中略）京都のお寺から何からみんな要らないんですよ。そしてただの形のないものだけを守ってあげばいいんですよ。それは本土決戦の思想なんだよね、そこまで行っちゃえば、つまり焦土作戦だね。軍が考えたことはそういうことだと思っただ。つまり国民の魂というものは目に見えないものでいいんだ。



どもね」と語っている。坂口安吾が唱えた「墮落」という実存様式は、時代に対する、自らの生命を賭した抵抗であり、その姿は作家の個性や自我を超えた普遍的なものを体現している、三島の安吾評を要約的に語れば、このようになる。

しかし、坂口安吾の「墮落論」を一読した者ならば、三島のこの言葉には、とまどいを感じざるをえないだろう。安吾の「墮落」という生存態度は、徹底的にアナーキーな実存様式としてある。そこでは自身の肉体やそれに根を持つ欲望のみが唯一絶対の真実であり、それ以外のすべてを、安吾は虚妄として排除している。特攻隊の勇士はただ幻影であるにすぎず、人間の歴史は闇屋となることから始まるのではないか、「天皇もただ幻影であるにすぎず、ただの人間になるところから真

この三島の発言の内、前半部分は明らかに安吾の「日本文化私観」における「法隆寺も平等院も焼けてしまつて一向に困らぬ。必要ならば、法隆寺をとりこわして停車場をつくるがいい。我が民族の光輝ある文化や伝統は、そのことによって決して亡びはしないのである」という言葉を踏まえたものである。ただし安吾の場合、形をもたない日本文化を「生活の必要」と言いかえており、それに根を持つならば西洋文明の模倣であってもそれは日本文化であると語っている。対して、三島が語る日本文化、「国民の魂」は、形而上学的な民族的価値への覚醒という語調を内包している。アナーキズム的、あるいは本能的、自我中心主義的な安吾の「日本文化」と比べて、三島の語る「日本文化」はきわめて観念的、形而上学的である。にもかかわらず三島はその安吾を、芸術家としてもっとも尊敬している、と最大限の賛辞をもって賞賛するわけである。三島の言う「国民の魂」を視座にするならば、むしろ三島は、安吾の思想なり日本文化論なりを、徹底して排除しなければならぬ。

最近、三島由紀夫を改めて読み返している私はこの矛盾を分析していくこ

実の天皇の歴史が始まるのかもしれない。そう語る坂口安吾の人間認識、歴史認識においては、理性以前、意識以前の生得的な生に根を持つ欲望・情動のみに人間の実存的本質が求められている。このような安吾の人間認識や文明観は、『英霊の聲』で「などてするめざは人間となりたまひし」と記した三島のそれとは、あまりにも異なる。真逆の関係にある、と言つてよい。

神であると信じられてきた天皇が終戦をきっかけに人間として意識されはじめたことを歓迎する安吾、戦時下にあつてすでに天皇は人間であり、その事実には深刻な絶望を抱いた『英霊の聲』の青年将校たち。天皇制の問題ひとつをとつても、両者の立ち位置はあまりにも隔たりがある。にもかかわらず三島は安吾を芸術家としてもっとも尊敬していると語るのであり、どのような思考過程を経て三島が安吾を評価するにいたつたのか、きわめて不可解である。

また、三島が安吾の思想に同調していた形跡は、石原慎太郎との対談における次の発言にも確認することができる。

全然形のない文化を信じるとすれば、目に見える文化は全部滅ぼし

とで、三島の実存様式の一端をかいま見ることができているのではないかと考えている。時期から考えて、おそらく三島は、七〇年代の思想状況の中で、自らの理念に殉じようと企図していた自分の姿を、安吾に重ねている。三島にとつて重要だったのは、自らが理想視する日本文化や国体の実現そのものではなく、あるいはそれ以上に、彼の言う「論理的・一貫性」、「金閣寺」の言葉で言えば、認識と行為の一致にあつたものではなかったか。

日本浪曼派の影響下で戦時中、観念の世界にあこがれつつ現実に対して無関心のままであつた三島が、戦後になって、それを実存上の危機ととらえ、克服を企図していた結果、観念と現実の一致を企図しはじめ、最終的に坂口安吾を評価するに至つたのではないかと。その意味で三島の政治的活動への傾斜は、政治上、文明論上の問題であると同時に、あるいはそれ以上に、実存上の問題を解決していく手段でもあつた。だからこそ三島は、自らが抱える実存上の難問について理想的解答を体現する坂口安吾を、賞賛したのではないかと。今私は、そんなことを考えている。

日本の伝統技術を守る 女性の進出

村上 裕道

本学文学部歴史遺産学科教授

設立を嚆矢とし、二〇〇七年に国の選定保存団体に選定され、二〇一六年に一般社団法人に組織替えを行い現在に至る。構成人員は、前記五分野の事業所二社（正会員）、技能者（準会員）二二七名である¹⁾。その内、今回報告する建造物「彩色」は事業所二一社、技能者五九名を数える。

なお、協会は「技術者の育成及び健全な文化財建造物装飾修理事業の発展・普及、責任ある施工の達成のため」技能者の研修制度と認定制度に積極的に取り組んでいる²⁾。

はじめに

二〇二〇年二月一七日付ユネスコ無形文化遺産「伝統建築工匠の技」の登録を機会に、伝統建築技術の分野における女性の進出状況について調査してきた。これまで「建造物修理」、「檜皮柿葺ひのかわかき」に関して実態を調査してきたが、本稿では、「建造物装飾」の内の「彩色」について報告したい。

（一社）社寺建造物美術保存協会（以下、協会で記す。）は、「建造物装飾」選定保存技術の保存団体として、「漆塗り」「彩色」「剥落止め」「単色塗」「鏝かきり・金具」の五分野の保存継承に取り組む団体である。一九九〇年の任意団体の

「彩色」部門の研修過程を見ると、一〜三年目には、概論・文化財行政、文化財保護の歴史、材料概論、実習・下塗顏料の調合、縹あざ・網彩色³⁾、文様の摸写及び見取り図、金箔・金泥の扱い方等、基本的な技量の習得を主としている。四〜七年目には、概論の他、置上彩色、金箔上への着色実習、伝統技法の探求として、「腐れ胡粉」等の作成、関東と関西の技法の違いを習い、技量の向上に取り組む、そして、八年〜一〇年目には、化粧裏板への唐草文様彩色の作成、復元図の作成と一〇年で一連の技量の習得を目指している。

荒木かおりが主宰する（有）川面美術研究所（以下、「研究所」で記す）

は、明治五年から「都をどり」等、舞台背景画の制作活動に取り組んだ野村芳国・野村芳光を嚆矢とする。そして、京都市立絵画専門学校を教授を務めた入江波光の下で父の川面稜¹⁾が学ぶ。国宝法隆寺障壁画の複写事業に入江波光が携わる際、川面稜一も助手として参加し、文化財建造物の彩色分野の基を形成する。後に、文化庁の国宝等彩色の摸写事業の計画を立案実施するとともに、国宝等の彩色修理に取り組む、一九八四年に研究所を設立、二〇〇〇年に娘の荒木かおり氏が代表取締役所長となり現在に至る。

荒木氏は、大学在学中の二一才の時に国宝二条城二の丸御殿の障壁画の摸写事業に参加、以降、四一年間、建造物彩色の事業に取り組んでいる。なお、研究所事業経歴によれば、氏が所長となつて以降で一四七件の修理、制作等の事業を実施している。

現在、所員は、一四名でその内二二名は女性という。協会全体では、漆塗り、単色塗、鏝・金具の分野は現在もほぼ男性が占めるが、彩色分野では、約六割が女性という。

彩色分野が飛びぬけて女性の占める割合が多い理由を聞くと、彩色事業に就業する人たちは、基本的に日本画を



写真① アトリエで制作に励む荒木かおり氏
現在も大作に取り組みつつ、全体事業の調整も実施する超多忙な毎日を送る



写真② 石清水八幡宮 撮影社狩尾社の修復事業に取り組む織田菜里さん

専攻する学生が主であること、現在、日本画専攻の学生はほぼ女性であることから、女性の比率が高止まりするとは避けられないとのことであった。

一方、彩色の仕事量から比較的收入は厳しかったため、男性も何人か入所したが続かなかつた。将来設計ができなければ今後も難しいと思つたという。そのため、氏が協会の会長であった時に一般社団法人化を行つて受託を可能とし、その結果、国庫の支援を受けて研修制度による技術保証に取り組めるようになったとのことであった。

現在、国庫補助事業による保存修理事業等では九九%以上の事業について、

協会正会員が当たっている。伝統技術の地位確立が進んできたことが判る。

織田菜里は、二〇一九年に研究所へ入所した若手である。滋賀県内の美術系大学に入学し、日本画を専攻した。就職を考えた際、大学で習っている技量を活かしたいと思つたが、キャリアセンターの資料では、伝統技術分野の情報が多かつたらしい。授業で絵画修復現場を見学することがあり、このような職種があることを知り、自力でインターンシップ先を探したという。

なお、現在の修理現場の環境については、建造物修理技術者の感想と同じく、あまり不満をもっていないとのこと

とであった。京都府の現場は、市中が多く比較的環境も恵まれているが、かなり改善してきているようである。石清水八幡宮撮影社狩尾社は、環境条件を整え難い小さい現場であったが、覆屋内は明るく、私の経験していた現場より格段に改善されていた。

まとめ

協会が地位の向上には取り組んでいるが、魅力ある職場の改善には、社会全体で取り組む必要がある。彩色技術は、女性率が九割弱となる、川面美術研究所のような会社も出現しており、既に女性によって守られている業種となっている。本業種も課題は後継者のリクルートにあるが、そもそも大学のキャリアセンターの職業情報に女性が主となっている伝統技術もあることが周知されていないことが問題である。今後に期待したい。

- 1) 『令和五年度社寺建造物装飾技術者研修会報告書』、二〇二四年三月。
- 2) 『文化財修理の品質向上と新しい技能者資格制度』（一社）社寺建造物美術保存技術協会、二〇二三年一月。
- 3) 社寺建造物の装飾等に見られる、色の濃淡を順に組み合わせて立体感や彩色の華やかさを表現する彩色技法。

51

連載●イギリス女性生活誌 教え広められるべき価値観 としての「衛生思想」

松浦 京子

京都橘大学名誉教授

一九世紀の労働者階級の「レジェンド・ウーマン」の活躍を語るために注目したのが、伝道組織に雇用され貧民のために活動したバイブルウーマンである。彼女たちは前回述べたように「(二つの階級をつなぐ) ミッシング・リンク」となることを期待され、中流階級が価値あると認めるものを労働者階級女性にも広める教導者的役割を担ったわけであるが、その教導内容は信仰のための教えに加えて新たな価値観、知識も含まれていた。たとえば、衛生的であることを重要視する「衛生思想」がそれである。そして、それはまさしく一九世紀という時代に規定され創生されたものであった。

一九世紀イギリスでは、産業革命後の繁栄を謳歌する一方で、急激に進んだ工業化、都市化がもたらした混乱というべき生活環境の劣悪化、都市的貧困の堆積、退廃、そして感染症の頻発や乳幼児死亡率の高さに象徴される民衆の低い健康状態などが、中流階級以上によって社会的課題として認識されるところとなった。それゆえ、医学などの近代諸科学の発達を背景に、こうした課題に対処するための対策が模索され、提言され、実施されてもいった。それら対策の一つが衛生改革であり、公衆衛生関連の法規や行政官の設置に加えて下水道の整備などの環境衛生が進められたわけであるが、同時にそれは新たな価値観の形成を伴っていた。すなわち「衛生的であること、それは精神と身体の健全に関わる重要事」という「衛生思想」を生み出してもいたのである。



G・ドレが1872年に刊行した画集『ロンドン巡礼』の中の「Over London by Rail」より。
住宅の上を通る機関車からのばい煙による大気汚染のなか隙間なく家々が建て込み、複数家族が同居し合い上水の樽も不衛生という状況が示されている。

の思想は、当然ながら上記の諸課題への対応として労働者階級にも共有されるべきものとされた。しかし、一九世紀前半から都市部で結成さ

れていた改革推進を掲げる篤志組織が、労働者階級を意識した衛生知識の普及活動に着手はしたものの、学校教育を通じての啓発経路は未だ存在しておらず、「衛生思想」の共有は容易なことではなかった。そのような状況にあつて、一八五七年、家庭の衛生状況に大きく関わる女性を特に啓蒙対象とする動きが起こった。「我が国に見られる低い身体状況の主たる原因は『健康法則』に対する無知であると確信しこれの重要部分の知識を普及させるために」という設立趣意のもと、その名も「衛生知識普及婦人協会」なる篤志組織がロンドンに結成されたのである。

「衛生知識普及婦人協会」は二年後に「婦人衛生協会 Ladies' Sanitary Association (以後、LSAと略)」に改称し、一九〇〇年頃まで「衛生思想」に関わる知識・情報を盛り込んだ小冊子の発行と配布を中核とする活動を続けた。結成時のメンバーの中心は、一九世紀半ばの衛生改革に医学、行政、政策立案の面で関わっていた人物の妻たちであったが、中には初期フェミニズムの代表格の一人であったB・R・パークスも含まれるなど、中流階級女性の公的活動、社会貢献活動の事例にあたるとも言える。また、ヴィクトリア女王の長女にしてプロイセン王太子妃(後のドイツ帝国皇后、皇太后)を筆頭に女性王侯貴族らがパトロンに名を連ね、各年次大会の議長や基調講演者をシヤフツベリ伯爵など錚々たる紳士貴頭が務め、各種の専門雑誌においてもたびたびその活動が言及されていた。こうした注目度の高さは、衛生改革の推進が重要課題であり、そのためには社会における「衛生思想」の普及すなわち衛生観念の定着が不可欠であるとの認識があつたからであるが、とりわけLSAが発行する小冊子の多くが労働者家庭の女性をターゲットにした内容であり、なおかつ実際に彼女たちの目に触れ、耳に届くものとなつたことが大きく意味をもつたからと考えられる。

LSAは結成当初から、「労働者階級女性こそがもっとも衛生知識を必要とするにも関わらず、それを伝え教えるのは最も難しい」との認識を示してお

り、彼女たちを対象とした平易で面白い内容の小冊子の編纂に取り組んでいた。また、配布するだけでは読まれないことも理解し、労働者家庭に赴いてその内容を直接伝え、実践することのできる存在、労働者家庭の女性の教導者となりうる存在を不可欠とみて重視した。奇しくもLSAの結成はバイブルウーマンの活動開始と同年であった。それゆえLSAは小冊子を聖職者、そしてデイストリクト・ヴィジターやマザーズ・ミーティング主宰者など貧民の間で活動する中流階級女性、組織に提供しつつ、年次報告においては特にバイブルウーマンに言及し、彼女たちによる配布や販売を「衛生思想」浸透の有効例として挙げていたのである。

たとえば、最初期に刊行され長く発行されつづけた『安上がり医師、それは新鮮な空気』という本文8頁の小冊子がある。内容は村の女教師が病欠している教え子の家を訪ね、閉じられたままの窓を開け「新鮮な空気と日光」を部屋に取り込むことでその効用を納得させるといふものである。換気の重要性の強調など衛生知識というにはあまりに初歩的な内容であるが、そもそも一九世紀半ばは、細菌に関する知見も発展段階でウィルスなどは知られてもおらず、「衛生的である」といってごく基本的なことにすぎなかったのである。しかし、このような「今では当たり前のこと」をまずは教えることが肝要であり、なおかつ難しくもあつた。それゆえ、この小冊子の内容をなぞって語り聞かせ、また実践してみせることができるバイブルウーマンが必要とされていたのである。

加えて、バイブルウーマン、すなわち聖書販売を通じての伝道者でもある彼女たちだからこそ相応しいという面も存在していた。なぜなら、「衛生的であること、それは精神と身体の健全に関わる」という「衛生思想」には「清潔であること、すなわち敬神である Cleanliness is Godliness」という価値観が確固として存在していたからである。この点も含めて、次回でバイブルウーマンによる小冊子を使った「衛生思想」、価値観の伝達内容について触れることとしたい。

近代日本音楽史を 彩る女性たち

12

最初の音楽サタレ を開催した日本人 原信子(その2)

佐野 仁美

本学発達教育学部
児童教育学科教授

帝劇オペラのスターであった原信子（一八九三―一九七九）のその後の活動を辿っていきます。開場からわずか五年後の一九一六年に、初の西洋式劇場である帝劇の歌劇部（洋劇部）は幕を閉じました。指導者のイタリヤ人ローシーは、赤坂見附の映画館をミュージックホール風に改装してローヤル館と名付け、原は清水金太郎夫妻らとともに、ローシーと活動を続けます。定員五〇〇名の日本最初のオペラ専門劇場のローヤル館は、午後七時半開演の一日一回公演で毎月二〇日または二五日間の興行でした。演者とコーラスを合わせて三〇名、オーケストラは一四名という編成であり、オペレッタの翻

代で、映画を見るより外に楽しみがなくて、「外国のスタアの肉体と服装とを備えたような婦人」を求め、「それに似たものを見るためにしばしば金龍館や日本館や観音劇場のオペラへ行った。そしてあの頃の原信子や、「中略」石井小浪嬢の舞台姿を眺めて、幾分か渴を癒やしていた」と回想しています。先ほどの河上も、一中時代に校禁を犯して浅草で活動（写真）やオペラを見た述べています。

谷崎の言葉からわかるように、映画から西洋文化に憧れた大衆は、高尚な芸術よりもわかりやすさを求めており、観客を飽きさせない工夫が必要でした。浅草オペラでは、オペレッタやオペラ、少女歌劇、ミュージカル、喜劇、バレエなど三種から五種の出し物が昼夜二回、一〇日毎に入れ替えというスタイルで上演されます。

音楽評論家の堀内敬三も、浅草の



原信子
(出典：『オペラ』1919年5月号)

歌劇は、人々の輪郭を露呈する洋風舞台衣装と、色彩の強烈な洋風舞台脂粉と、圧倒的に氾濫する

訳上演を中心に作品の改変も行われなかった。赤坂という場所柄、観客には外国人が多く、一九一六年一〇月のオッフェンバック《天国と地獄》の初日は、各国の大使が着飾った夫人とともに馬車で来場する華やかなものでした。

原は一九一七年一〇月にマスカニー《カヴァレリア・ルスティカーナ》を初演し、これは初のオペラ全曲原語上演となります。しかし、同年一月の《セヴィリアの理髪師》初演後、原はローヤル館を去り、清水も二月で脱退します。後に原は、多額な専属料の他に出演料まで出た帝劇とは異なり、ローヤル館では衣装はほとんど帝劇から借り、緞帳もミシンで作ったと語っています。文芸・音楽評論家の河上徹太郎は『私の修学時代』で、「オペラでは、赤坂見附のローヤル館で原信子のボツカチオを見たのが最初だったが、当時私はこんな精妙な芸術形式が存在するとは、夢のような奇蹟に思えた。『中略』然し開幕の頃の客の数は、如何に貧弱なこのコーラスの人数にも及ぶことはなかった」と証言しています。このように、本場を志向したものの客の入りが悪く、金銭的苦境が続いたローシーは、一九一八年二月に渡米します。富裕層や外国の賓客向けに歌舞伎と一緒にオペラが上演された帝劇と、そ

律動的音響によって直接的な官能的刺激を与えたと書いています。正統派の評論家からは眉唾物の浅草オペラでしたが、西洋音楽を用いて、洋装で体の輪郭を露わにした女優を近くで観られる大衆向き出し物と料金設定で、若者を中心に人気を博しました。明治時代の娘義太夫に夢中になり、物語が佳境に入ると「どうするどうする」と声をかけた堂摺連に代って、熱狂的に女優を応援したり、追いかけてりする青年たちが現われ、「オペラごろつき」の略で「ペラゴロ」と呼ばれます。その中には、川端康成らも含まれていて、彼らが正口マンに象徴される、自由な雰囲気味わったことが想像されるでしょう。

常に外国の名作オペラ、オペレッタを取り上げていた原は、一九一八年五月にはシュトラウスの《サロメ》を原語上演します。《サロメ》は、当時最新の刺激的なオペラでした。朝日新聞一九一八年三月六日には、「アルカンタラの医師」で信子が盛んに咽喉を聞かせるが場所柄として脚本はまだ程度が高過る「同五月一日には、「歌劇としてのサロメは日本では皮切りだけに大分忠実に演出していた」という評が見られます。原は一〇月から駒形劇場で清水金太郎らとの合同公演を行うも

れを引き継いで本格的なオペラの上演を目ざしたローシー・オペラは失敗に終わりましたが、オペラは意外な場所

で花開きます。今回は、浅草オペラについて述べておきましょう。ローシー・オペラから離れた原は、浅草の観音劇場を経営していた喜劇役者の曾我廼家五九郎から頼まれて原信子一座を立ち上げ、一九一八年三月から出演するようになります。第一作の新聞広告には、原信子改作喜歌劇《アルカンタラの医師》として、原が座員と会社の切なる望で観音劇場の人となったことが書かれています。

明治より浅草公園六区は、見世物小屋や演芸場が立ち並び、映画や芝居、講談、曲芸などが行われる有数の歓楽街でした。浅草オペラは、アメリカ帰りのトードダンスの踊子、高木徳子が一九一七年一月に浅草の常盤座でミュージカル《女軍出征》を演じて大人気となったことから始まり、他館へと広がっていきます。第一次大戦の戦需による好景気で、輸入映画を見て西洋の風俗に慣れつつあった大衆が、西洋の演芸に興味を持つようになったのです。

谷崎潤一郎は『東京をおもふ』という随筆で、大正八、九年頃は、まだ女学生も海老茶の袴を穿いているような時の、一九一九年二月に退き、三月のローヤル館での《ボツカチオ》公演のち引退します。『オペラ』一九一九年五月号の「舞台を引いて」という文章では、「芝居に二ツ三ツの歌を入れ、それぞれオペラ、どんな声を出して歌おうともかまわない芝居本位のオペラ」を嫌と思うと歌えず、勉強しなくなると語り、再び渡米します。オペレッタを簡略化した浅草オペラは人気を博しましたが、演芸場を改装した小屋に不完全な舞台装置を用い、興行期間が短くて練習時間も取れないような状況で、レヴェルは低く、劇団員の離合集散も目まぐるしいものでした。海外で原が見たオペラとはあまりに異なっていたのでしよう。

第一次大戦後には、復興が遅れたヨーロッパからオペラ団が来日し、本格的なオペラを聴かせるようになり、浅草オペラは戦後の不景気で衰退し、関東大震災によって壊滅的な被害を受けました。しかしながら、原をはじめとする歌手が録音した通俗的なオペレッタのアリアのSPレコードは巷に流れ、西洋音楽を大衆化することに貢献したのです。（以下次号）

【主要参考文献】

中野正昭『ローシー・オペラと浅草オペラ』森話社、二〇一二年。
堀内敬三『音楽五十年史』鱗書房、一九四二年。

紫式部と女房の時代

- 日時：2024年6月15日(土) 13:00～16:30
- 会場：キャンパスプラザ京都
- 講師：福嶋 昭治 (園田学園女子大学名誉教授／元京都橘大学文学部教授)
「紫式部の宮仕え」
増測 徹 (和歌山県立紀伊風土記の丘館長／京都橘大学名誉教授)
「中下級貴族出身の女房たち」
- コメンテーター：松村 淳子 (宇治市長)
「まちの記憶を未来につなぐ ～かいまみる、平安時代の宇治～」
- 司会・コーディネーター：野村 倫子 (本学文学部日本語日本文学専攻教授)

①「著者・紫式部と宇治」

本学文学部日本語日本文学専攻四回生 平岡 ゆかり

今年度のシンポジウムでは、平安時代に活躍した紫式部を取り巻いていた女房の働きについて、福嶋氏、増測氏が講演を行った。さらに『源氏物語』の舞台である宇治の文化について、松村氏がコメントを行った。

初めに福嶋氏は、『紫式部日記』などに見られる他者を自己視したうえでの悲観的な表現から、紫式部の宮仕えが必ずしも幸福なだけではなかったこと、周囲と異なるものに対する観察力や共感力を持った女性であったと示した。また齋院づき女房への反発や同僚である中宮彰子の女房達への評価、清少納言への批判を取り上げ、自分たちにはできない思慮や機転を評価していたからこそ、周囲の女房らに対する対抗意識があったのではないかと考察した。

次に増測氏は、通常の女房が上級貴族や後の実家の職員を始めとする中下級貴族の出身者で構成されることを指摘し、紫式部がこれらの構成原理に当てはまらないとした。そこから、紫式部は個人の学問的能力を評価されたことで、彰子派閥の発展



や道長主体の新儀式形態を成立させるための記録係としてスカウトされたのではないかと結論付けた。

最後に松村氏は、京都市のベッドタウン・観光都市・三角形街区といった現在の宇治市の特徴は紫式部の生きた平安時代より受け継がれた、まちの記憶であるとしてコメントした。

また、源氏物語ミュージアムを始めとする平安時代の文化を伝承する取り組みを紹介した。

以上の講演とコメントを受け、パネルディスカッションでは会場から多くの質問が寄せられた。ここでは、パネルディスカッションでは、各講演にて時間制限により伝えられなかった箇所を補足説明がなされた。

福嶋氏は、紫式部は『源氏物語』の「柏木」で白楽天の詩を引用しているが、その内容から紫式部は知識としてだけでなく、奥行きをもって漢詩を引用していることが理解できると述べた。また『源氏物語』の舞台の一部は「宇治」であるが、しっかりと宇治の歴史や背景を踏まえた上で物語を作られていると述べた。

増測氏は、『紫式部日記』は新しい儀式や政務日記を記すために執筆された儀式書的な役割を果たしている」と述べた。また、紫式部が女房に扱われたからと考え、紫式部が女房勤めにしたことにより、父である藤原為時も道長との関係を築くことができた」と述べた。

女性史研究のさらなる発展を期して、シンポジウムは終了した。



特に質問が多かった、宇治地域と『源氏物語』の関わりについて一つ取り上げる。『源氏物語』における光源氏と八の宮の別荘とのモデルとしたのではないかと述べた。

②「紫式部の視た世界」

本学文学部歴史学科四回生 浅倉 菜那／合田 春香／田中 かれん

はじめに、福嶋氏が『紫式部日記』

の記述から伺える紫式部の心情について講演された。紫式部は幼少期から文才に優れており、『和漢朗詠集』では藤原齊信から届いた漢詩の一部に続きの詩を和歌で書いて返したという稀有な才能がうかがえる。紫式部が綴った日記の記述から、周囲から心理的に隔絶し自分の将来や現状を憂う紫式部の気持ちこそ彼女の作家としての心眼であり彼女の世界観である、と述べられた。

福嶋氏の話から、紫式部が社会的評価に囚われず他者とは異なる視点で物事を観察していたからこそ『源氏物語』のような作品を書くことができたということを知ることができた。また、日記から垣間見える紫式部の心情について非常に興味深く感じた。

次に増測氏が、紫式部のような中下級貴族出身の女房について講演された。

『紫式部日記』などの資料によると、女房集団の人数は総勢四〇人程度で、自身の女房集団と母方からの援助集団で構成されており、母系で継承されていくことがわかる。

また増測氏は、『紫式部日記』が執筆された理由について、同時期に道長が藤原行成に『九曆』を写させる

『私の身体を生きる』

西加奈子・村田沙耶香・柴崎友香 他著 文藝春秋 2024年5月刊

山内 由賀 本学文学部歴史学科専任講師

本書は17人の書き手が「身体」をテーマとして記した作品集である。錚々たるメンバーの職業はいずれも小説家、美術作家、漫画家などとさまざまだが、自身の「身体」との向き合い方もまた多様である。ある人は性の目覚めについて振り返り、ある人は出産の体験を語る。

わたしたちは自身の「身体」について問われたとき、一体何を思い浮かべるだろうか。体型の悩み、身にまとうファッション、あるいは病気かもしれない。だが、「身体」について考えるとき、そこには「性」が絡んでくる。とくに女性の身体には、月経や妊娠、出産といった大きな変化がしばしばつきまとう。しかし、女性が自身の「身体」やそれに関わる「性」について赤裸々に語るのはタブー視されてきた。筆者の一人である柴崎友香は、「女性が自らの身体や性について自分の言葉で語ることは長らく抑圧されてきたが、一方で、身体や性について説明や理由を求められるのも、女性や性的マイノリティ側である」と記す。

歴史のなかで女性の「身体」は男性たちから見ら

れる対象であり、身体とともに女らしさが規定されてきた。いまなおそうした枠組みから抜け出すのは難しいときがある。

はたして、わたしの「身体」はいつからわたしのものなのだろうか。わたしたちは自身の「身体」をほんとうに手にしているのだろうか。こうした「身体」のあり方をめぐる学術的な議論については、女性歴史文化研究所が2018年に刊行した『身体はだれのものか—比較史でみる装いとケア』*もぜひ参考にしてほしい。フェミニズム運動のなかで女性たちが獲得してきた性や身体の自己決定権が世界で揺れ続けているなか、改めて自身の「身体」を見つめる大切さを忘れないようにしたい。

*『身体はだれのものか—比較史でみる装いとケア』（南直人・北山晴一・日比野英子・田端泰子 編／昭和堂）。女性歴史文化研究所第12プロジェクト「装いと身体の歴史」の研究結果として出版された。



LIME 通信

今年7月に新紙幣の流通が始まり、渋沢栄一の一万円札、津田梅子の五千円札、北里柴三郎の千円札にも馴染んできた頃ではないでしょうか。世界初の3D肖像が回転する最先端技術など、新しいお札は150年以上培った日本の偽造防止技術の結晶といわれています。

歴史を紐解くと女性が肖像に採用された例はめずらしく、1881(明治14)年に神功皇后(實在是疑問視されています)が初の肖像入り政府紙幣としてデザインされた後、120年ほどあいて前回2004年発行の樋口一葉の五千円札、そして今回の津田梅子とようやく3人目となりました。

女性が少ない理由には偽造防止や印刷技術の関係もあったと言われ、直ちに男女不平等とはいえ

ないものの、女性肖像の裏面に動物や風景ではなく花がモチーフに使用されているあたり、ジェンダーロールに対する固定観念をぬぐい切れません。実際、新紙幣の図柄に採用された「藤の花」には女性らしさを象徴する花言葉が多く、謙虚さや奥ゆかしさを連想させます。

津田梅子は女子英学塾(現・津田塾大学)の創設など近代的な女子高等教育に尽した人物です。我が国のジェンダー・ギャップ指数の低迷(2024年6月発表:118位/146か国)からの脱却を期待し、新しいお札の顔に女子教育の変革を担った先駆者である津田梅子を採用したのであれば、女性をエンパワーメントするメッセージとして前向きに捉えたいものです。(西野)

CHRONOS(クロノス) vol.51

発行日: 2024年10月

発行: 京都橘大学 女性歴史文化研究所
〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34
Tel.075-574-4186 Fax.075-574-4149
E-mail: iwhc@tachibana-u.ac.jp



京都橘大学
女性歴史文化研究所